

このアンケート方法は期間がおおよそ1カ月だけであったが、群れを特定する方法としては有効であった。しかし、今回は山口県庁をとおして、被害対策のための調査と位置づけられていたため、緻密な資料が収拾できたと考えられる。正確で緻密なアンケート調査を行うには、目的を明確にするとともに、アンケート対象者の立場を配慮しなければいけない。

まとめ：今年度は島根県でテレメーター法による追跡調査を計画していた。しかし、捕獲と再捕獲の体制がとれず先送りになってしまった。捕獲と追跡の体制づくりはゆっくりと取り組んでゆきたい。

群れサイズの小型化は岩国市の野生ニホンザルの群れにも見られた。

計画：1-5

近畿圏におけるニホンザルの分布の実態調査 -その2

清水 聡・武田 庄平・金澤 忠博
(大阪大・人間科学)

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査の3年目として、今年度は昨年度に引き続き兵庫県における生息実態の調査を行った。

昨年度調査質問紙を送付して回答のなかった市役所、町・村役場に再度調査質問紙を送付し回答してもらったところ、昨年度分と合わせて結局91市町村の内91.2%にあたる83市町村より回答が得られた。

調査質問紙による分布状況は昨年度と同様であった。すなわち、1) 1970年代から複数回行われてきた過去の生息実態の調査が認められた地域には現在もニホンザルが生息していること、2) 昔は生息していたが、1970年代の調査において否定された但馬北東部において新たに集団の生息が確認されたこと、の2点である。

1) については、一部地域(美方町、春日町、大河内町、西紀町)で1980年代に大量の捕獲が実施され、集団数および個体数は減少している可能性が高いが、地域個体群として絶滅したわけではなく、従来から集団が生息していた地域では現在も生息し続けていることが明らかになった。

2) については、数度の実地調査を行った結果、豊岡市、城崎町、竹野町、日高町にまたがる地域

に3~4集団100~150頭が生息していることが明らかとなった。1970年代の調査で生息が否定されたこの地域において、1980年代になってニホンザルの生息が確認されるようになった理由については明らかにならなかったが、この地域においては、猿害は拡大しているようであった。この理由としては、植林、山村の開発等の理由の他に、転作によって米以外のサルの餌となる食物を山裾の畑に作るようになったことが考えられた。

上述した調査質問紙に対する回答結果および、実地調査の結果から、現在のところ兵庫県に生息するニホンザルは、ごく大ざっぱに見積もって、集団数は20~25程度、頭数としては800~1200程度といったところであると推定される。

計画：1-6

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数

岡野美佐夫、泉山 茂之、濱崎伸一郎
(㈸野生動物保護管理事務所)

今年度は、伊豆地域を対象に聞き取り調査を実施し、昨年度のアンケート調査の結果を補足、検討した。

聞き取り調査を実施した地域は、熱海市、大仁町、伊東市、中伊豆町、東伊豆町河津町、下田市、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、賀茂村、土肥町、天城湯ヶ島の13市町村で、動物分布調査(環境庁1978年)の5キロメッシュ区画にして38区画に該当する。聞き取りは、農家や林業従事者を対象に、原則として1区画あたり4地点以上で実施し、全体で167件の聞き取り情報が得られた。その結果、伊豆半島において群れが分布する地域は、神奈川県湯河原町と隣接した熱海市域と、天城山脈より南の伊豆半島南部地域(伊東市南部、東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町)の2地域であった。

昨年度の結果と合わせると、伊豆・箱根地域に生息するニホンザルの群れは、①箱根地域(群れ生息区画数：12)、②愛鷹山地域(群れ生息区画数：6)、③伊豆半島南部地域(群れ生息区画数：17)の3つの地域個体群に分かれ、①と②は東西に約10km、①と③、②と③は南北にそれぞれ20km、35kmほど離れて分布していることがわかった。

この結果を環境庁の動物分布調査の結果と比べると、群れの生息区画数が大幅に減少(50→35)